

『温公續詩話』 訳注稿

北宋 司馬光 著

許山秀樹・松尾肇子・三野豊浩・矢田博士 訳注

「解題」

司馬光、字は君実、陝州夏県（今の山西省に属す）涑水郷そくすいけいこうの人。北宋・真宗の天禧三年（一〇一九）に生まれた。仁宗の宝元元年（一〇三八）に進士に及第し、国子館直講・集賢校理・知制誥・知諫院などを歴任。英宗の時、龍圖閣直学士となり、神宗が即位して、翰林学士に抜擢された。しかし、王安石の新法と合わず、官界を離れて洛陽に隠居し、『資治通鑑』の執筆に専念した。神宗が亡くなり、哲宗が即位すると、宰相職の一つである尚書左僕射兼門下侍郎として官界に復帰し、王安石の新法をことごとく廃止した。哲宗の元祐元年（一〇八六）九月、六十八歳で亡くなり、死後、温国公を贈られ、文正と諡された。著に『温国文正公文集』八十巻、『資治通鑑』二九四巻、『続詩話』などがある。

本稿は、司馬光の著した『続詩話』の訳注稿である。「詩話」とは、詩にまつわる逸話を書き綴ったもので、北宋の欧陽修の

『詩話』（六一居士と号したことから『六一詩話』とも称される）をもつて嚆矢とする。司馬光の『続詩話』は、自らもその序で表明している通り、欧陽修の『詩話』に続くという意図のもとに書かれたものである。死後、温国公を贈られたことから、『温公続詩話』とも称される。

「凡例」

テキストは、清・何文煥輯『歷代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とし、『和刻本漢籍隨筆集』第十六集（長沢規矩也編、汲古書院、一九七七年）を参照した。書き下し文は、漢字の読み（ルビ）の部分は現代仮名遣いを、送り仮名の部分は旧仮名遣いを用いた。

底本で校異が示されている部分については、原文に*印を付してその箇所を示し、【校異】の項目を設けてその内容を表した。

序

詩話尚有遺者、歐陽公文章名聲、雖不可及、然記事一也、故敢續書之。

【訓読】

詩話には尚ほ遺れる者有り。欧陽公の文章の名声、及ぶべからずと雖も、然れども事を記すは一なり。故に敢て続けて之を書す。

歐陽公 欧陽修（一〇〇七～一〇七二）、字は永叔、号は醉翁、また六一居士。北宋の政治家・文人。「六一詩話」を著す。司馬光のこの詩話は、欧陽修の詩話の続作との自覚の下に書かれたものである。

【現代語訳】

詩に関する話には、まだ記されずに残っているものがある。私は欧陽公の詩文の名声には及ばないとは言うものの、事柄を記述するということについては同じである。それゆえ、思い切って続けてこれを書く。

一

文徳殿、百官常朝之所也。宰相奏事畢、乃來押班、常至日旰、守堂卒好以厚朴湯飲朝士。朝士有久無差遣、厭苦常朝者、戲爲詩曰、「立殘階下梧桐影、喫盡街頭厚朴湯」。亦朝中之實事也。

【訓読】

文徳殿は、百官常朝の所なり。宰相事を奏し畢り、乃ち來りて押班するや、常に日旰に至る。守堂の卒、好く厚朴湯を以て朝士に飲ましむ。朝士に久しく差遣無く、常朝を厭苦する者有り。戯れに詩を爲りて曰く、「立残す階下梧桐の影、喫尽す街頭厚朴の湯」と。亦た朝中の実事なり。

文徳殿 宋代の宮殿の名前。 **押班** 『漢語大詞典』(第六冊、四五九頁)によれば、百官の席次を管理すること。「押」には、公文書にサインをするという意味があることから、おそらくここでは、百官の序列に従って出勤簿にサインもしくは押印することを指すのであろう。 **厚朴湯** スープの一種であると思われるが、未詳。『佩文韻府』(巻二二の下)に項目が立てられているが、用例としては、この詩が引用されているだけである。 **日旰** 日没。 **日暮れ**。 **差遣** もとは地方官に派遣されることを意味したが、宋代では転じて、実質的な職務に就くことをいう。 **階下梧桐影** 実質的な職務に就くこと

ができないままに、空しく時間を過ぐす役人を暗示するのだからか。

【現代語訳】

文徳殿は、百官がいつも朝会する場所である。宰相が奏上し終わると、ようやくここにやって来て、席次に従って出勤簿にサインをする。その時分には、いつも日暮れ時になっていた。文徳殿を警護する守衛は、よく厚朴湯を朝士に飲ませた。朝士の中に、実質的な職務に長い間つくことがなく、毎日の朝会にうんざりしている者がいた。そこで戯れに詩を作り、「宮殿のきざはしの下に立つ梧桐の影は、日暮れとともに薄れ行き、宮門を出た道端で、厚朴湯を飲み尽くす」と詠った。これもやはり宮中の実事である。

一一

惠崇詩有「劍静龍歸匣、旗閒虎繞竿」。其尤自負者、有「河分岡勢斷、春入燒痕青」。時人或有譏其犯古者、嘲之、「河分岡勢司空曙、春入燒痕劉長卿。不是師兄多犯古、古人詩句犯師兄」。

進士潘閔嘗譴之曰、「崇師、爾當憂獄事、吾去夜夢爾拜我、爾豈當歸俗邪」。惠崇曰、「此乃秀才憂獄事爾。惠崇、沙門也、惠崇拜、沙門倒也、秀才得毋詣沙門島邪」。

【訓読】

惠崇の詩に「劍静かに龍匣に帰り、旗閒かに虎竿に繞る」なるもの有り。其の尤も自負せる者に、「河岡勢を分かちて断たれ、春焼痕に入りて青し」なるもの有り。時人或は其の古を犯すを譏る者有り、之を嘲るに、「河岡勢を分かつ」は司空曙、「春焼痕に入る」は劉長卿。是れ師兄の多く古を犯すにあらず、古人の詩句師兄を犯すなり」と。

進士の潘閔嘗て之に譴れて曰く、「崇師、爾當に獄事を憂ふべし、吾れ去る夜爾が我を拜するを夢む。爾豈に當に俗に歸するべきか」と。惠崇曰く、「此れ乃ち秀才獄事を憂ふるのみ。惠崇は、沙門なり。惠崇の拜するは、沙門倒るるなり。秀才沙門島に詣ること毋るを得んや」と。

惠崇 北宋初期の「九僧」の一人。詩と絵にたくみであった。

『全宋詩』卷二二六（第三冊一四六四～一四七三頁）に詩が掲載されている。「河分二句」詩の題は「訪楊雲師淮上別墅」。『全宋詩』卷二二六（第三冊一四六四頁）。「河分岡勢斷」ここでは「河岡勢を分かちて断たれ」と訓読し、河

が岡を二つに分断するように流れる景色を描いたものとして解釈したが、あるいは河の流れが岡によって二つに分断される景色を描いたものであるかもしれない。その場合は、「河岡勢に分かれて断たれ」と訓読することになる。「春入燒痕青」この句はいわゆる兼語式で、「春が焼き畑の痕にやって来て、そこに春の草が芽生え、その焼き畑の痕が青く見える」という意味であろう。だとすれば、前の「河分岡勢斷」の句も

また、対句という観点から、同様に兼語式と捉え、「河 岡勢を分かちて断たれ」と訓読し、「河は岡を分かちつように流れ、それによって岡は二つに断ち切られる」と解釈されることになる。嘲之 北宋・劉攽の『中山詩話』では、「崇之弟子吟贈其師詩曰」として、以下の詩が引用されている。ただし、詩の内容から判断して、明らかに惠崇の詩作を嘲つていよう。

「河分岡勢司空曙」この詩は、『詩話総龜』にも掲載されている。ただし、『全唐詩』（巻二九二―二九三）に収められている司空曙の詩の中には、「河分岡勢」という語は見られない。「春入焼痕劉長卿」「春入焼痕」という語は、劉長卿の索引では見当たらない。楊世明校注『劉長卿集編年校注』（人民文学出版社、一九九九年九月）の巻末付録『歴代評論彙録』所引の『温公統詩話』の按語にも、「春入焼痕」之句今集中無之」とある。ただし、南宋・呉曾の『能齋漫録』巻八では、劉長卿の逸句として「春入焼痕青」という句が引かれている。潘閔 潘閔（？―一〇〇九）、字は夢空、号は道遥子。宋の太宗の至道元年（九九五）に、進士及第を賜る。『道遥集』がある。『全宋詩』巻五六―五七（第一冊六一―六三三頁）に詩が掲載されている。沙門島 流罪の島。ここでは、「倒」と「島」とが同じ発音なので、言葉あそびになっている。

【現代語訳】

惠崇の詩に、「龍を刻んだ剣は静かに箱にしまわれ、虎を描いた旗は、閑かに旗竿に巻かれる」というものがある。惠崇が

最も自負しているものに、「河は岡を分かちつように流れそれによって岡は二つに断ちきられ、春は焼き畑の痕にやって来て、そこに芽生えた春の草は青々としている」というものがある。当時の人で、その詩が古人の句を盗んでいることをそしめる者があり、これをからかって、「河 岡勢を分かち」は司空曙の句、「春 焼痕に入る」は劉長卿の句。師兄の句が多く古人の句を盗んでいるのではなく、古人の詩句が師兄の句を盗んでいるです」と詠った。

進士の潘閔が、ある時惠崇にふざけてこう言った。「崇師、あなたは獄事を憂慮すべきです。私は昨夜、あなたが私にお辞儀をするのを夢に見ました。あなたはきつと還俗なさることになるのではないでしょうか」。惠崇は言った。「これは実は、秀才殿が獄事を憂慮すべきなのです。惠崇めは、沙門でございませ。惠崇めがお辞儀をしますのは、沙門が倒れる、つまり沙門島を意味するのでございます。秀才殿はきつと、沙門島に流されることになるではありませんか」。

二

梅聖俞之卒也、余與宋子才選*、韓欽聖宗彦、沈文通邁、俱爲三司僚屬、共痛惜之。子才曰、「比見聖俞面光澤特甚、意爲充盛、不知乃爲不祥也」。時欽聖面亦光澤、文通指之曰、「次及欽聖矣」。衆皆尤其暴謔。不數日、欽聖抱疾而卒。余謂文通曰、「君雖不爲咒咀、亦戲殺耳」。此雖無預時事、然以其與聖俞同時、事又

相類、故附之。

【校異】

「子」は原文「之」に作るが、百川学海本に拠つて改める。

【訓読】

梅聖俞の卒するや、余 宋才子選、韓欽聖宗彦、沈文通遺と俱に三司の僚属たり、共に之を痛惜す。子才曰く、「比る聖俞の面を見るに、光沢特に甚し。意為らく充盛なりと。乃ち不祥たるを知らざるなり」と。時に欽聖の面も亦た光沢あり、文通之を指して曰く、「次は欽聖に及ばん」と。衆皆な其の暴謔を尤む。数日ならずして、欽聖 疾を抱きて卒す。余 文通に謂ひて曰く、「君 咒咀を為さずと雖も、亦た戲殺するのみ」と。此れ時事に預ること無しと雖も、然れども其の聖俞と時を同じくし、事も又た相類たるを以て、故に之を附す。

梅聖俞 梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）、字は聖俞。北宋の詩人。『橄欖』第一号、梅堯臣の項（二二四頁）参照。宋才子選 宋選、字は子才。『宋史』卷二八七「宋湜伝」に、「姪孫選、同学究出身」と簡単な紹介がある。韓欽聖宗彦 韓宗彦、字は欽聖。尚書兵部員外郎判三司塩鉄勾院を以て卒す。『宋史』卷三二五に伝がある。沈文通遺 沈遺（一〇二八—一〇六七）、字は文通。杭州錢塘の人。『西溪集』がある。『宋史』卷三三二に伝がある。三司 塩鉄・度支・戸部を三司といい、財賦をつかさどる。『宋史』卷三三六「司馬光伝」

に、「三司使掌天下財、不才而黜可也」とある。僚属 官・属吏。 充盛 顔色に光沢があつて、生気がみなぎっているさま。 無預時事 「詩に関する事ではないが」の意かと思われる。「時」は、「詩」の誤記ではないかと思われる。

【現代語訳】

梅堯臣（聖俞）が亡くなった時、私と宋選（子才）・韓宗彦（欽聖）・沈遺（文通）は、いずれも三司の属官であり、一緒にその死を哀悼した。宋選が言った。「近頃梅堯臣の顔を見たところ、色つやがとても良かったので、生気がみなぎっていると思つていたのだが、何とそれが不吉な兆しであつたとは。その時に韓宗彦の顔にもやはり光沢があり、沈遺は彼を指さして言った。「次は韓宗彦の番だろう」。一同は皆、その悪質な冗談を非難した。それから数日もしないうちに、韓宗彦は病氣になつて亡くなった。私は沈遺に向かつて言った。「君は呪いをかけたわけではないが、やはり彼を冗談で殺してしまったのだ」。このことは詩には関係のないことではあるが、それが梅堯臣の死と時を同じくし、事情もまた似通っている。それゆえこのことを付記しておく。

四

鄭工部詩有「杜曲花香醴似酒、灞陵春色老於人」、亦爲時人所傳誦、誠難得之句也。

【訓読】

鄭工部の詩に、「杜曲の花香 酒よりも醸く、瀟陵の春色 人よりも老いたり」なるもの有り、亦た時人の伝誦する所と為る。誠に得難きの句なり。

鄭工部 鄭文宝（九五丁一〇二）、字は仲賢。寧化（今の福建省寧化県）の人。工部員外郎・刑部員外郎・兵部員外郎などを歴任した。『宋史』巻二七七に伝がある。『檄攬』第一号「鄭文宝」の項（六五頁）参照。『杜曲二句』『全宋詩』巻五八（第一冊六四一頁）に、「長安送別」と題する断句として収録されている。 **杜曲** 陝西省長安県の南にある花の名所。韋曲の南に連なる。北杜と南杜に別れる。松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年一月）の「樊川（杜曲・韋曲）」の項（三二九頁）参照。 **瀟陵** 陝西省長安県の東にある、漢の文帝の陵墓がある丘。かたわらを瀟水が流れている。送別の地として名高い。魏の王粲の「七哀詩」其一に、「南登瀟陵岸、回首望長安（南のかた瀟陵の岸に登り、首を回くわらして長安を望む）」とある。本頁「杜曲」二句注所掲の『漢詩の事典』「瀟橋」の項（三三四頁）を参照。

【現代語訳】

工部員外郎の鄭文宝の詩に、「杜曲の花の香りは酒よりも濃く、瀟陵の春色は人よりも年老いている」というものがある。これもまた当時の人たちに伝誦された。誠に得難い詩句である。

五

科場程試詩、國初以來、難得佳者。天聖中、梓州進士楊諤、始以詩著。其天聖八年省試「蒲車」詩云、「草不驚皇轍、山能護帝輿」。是歲、以策用清問字下第。景祐元年、省試「宣室受釐」詩云、「願前明主席、一問洛陽人」。諤是年及第、未幾卒。

慶曆二年、韓欽聖試「勳門賜立戟」詩云、「凝峰畫旛轉、交鍛彩支繁」。范景仁云、「曾見眞本如此」。傳欽聖作「迎風畫旛轉、映日彩支繁」、故兩存之。

蘇州進士丁偃、試「邇英延講藝」詩云、「白虎前芳掩、金華舊事輕。天心非不寤、垂意在蒼生」。有古詩諷諫之體。偃是歲奏名甚高、御前下第。自是二十年始及第、尋卒。

滕元發甫、皇祐五年御試「律聽軍聲」詩云、「萬國休兵外、羣生奏凱中」。以是得第三人、最爲場屋所稱。

【訓読】

科場の程試の詩、國初以來、佳なる者を得難し。天聖中、梓州の進士楊諤、始めて詩を以て著る。其の天聖八年の省試の「蒲車」詩に云はく、「草、皇轍を驚かさず、山能く帝輿を護まもる」と。是の歳、策に清問の字を用ふるを以て下第す。景祐元年、省試の「宣室にて釐を受く」詩に云はく、「願はくは明主の席

に前み、一たび洛陽の人に問はれんことを」と。謂是の年及第するも、未だ幾ばくならずして卒す。

慶曆二年、韓欽聖「勳門にて立戟を賜ふ」詩を試みられて云はく、「峰を凝めて画幡転じ、鍛を交へて彩支繁し」と。范景仁云はく、「曾て真本を見るに此の如し」と。伝欽聖作に、「風を迎へて画幡転じ、日に映じて彩支繁し」と。故に両つながら之を存す。

蘇州の進士丁儻、「邇英にて延せられて芸を講ず」詩を試みられて云はく、「白虎の前芳も掩はれ、金華の旧事も軽し。天心痛らざるに非ず、意を垂るるは蒼生に在り」と。古詩の諷諫の体有り。儻是の歳、名を奏すること甚だ高きも、御前にて下第す。是れより二十年にして始めて及第するも、尋で卒す。

滕元発甫、皇祐五年「律を（吹きて）軍声を聴く」詩を御試せられて云はく、「万国休兵の外、群生奏凱の中」と。是を以て第三人を得、最も場屋の称ふる所と為る。

科場 科挙の試験場。

程試 一定の方式を定めて試験をすること。

天聖 北宋仁宗の年号。一〇三三年～一〇三三年。天聖八年は一〇三〇年。

楊講 梓州の人。仁宗の景祐元年の進士。嘉祐年間に、瀘州軍事推官となる。『全宋詩』巻二六七（第五冊三三八五頁）に、五言古詩一首、句四篇を収録する。

省試 礼部の主催する科挙の本試験。

蒲車詩

蒲車は、ガタガタ揺れないように、蒲で車輪を包んだ車。『草不』句 『全宋詩』巻二六七（第五冊三三八五頁）に、断句として収められている。

清問

天子が臣下につまびらかに問うこと。「清」の字は、天子の行為について用いる。『書経』の「呂刑」に「皇帝清問下民（皇帝 下民に清問す）」とあり、また唐の元結の「忝官引」に、「公車詣魏闕、天子垂清問（公車 魏闕に詣で、天子清問を垂る）」とある。科挙の答案には、天子の質問の文字を用いてはいけないことになっていた。

景祐元年 一〇三四年。景祐は仁宗の年号。一〇三四年～一〇三七年。

宣室受釐 宣室は皇帝の居る正室。受釐は祭祀用の肉を受けること。『史記』巻八四「屈原賈生列伝」に、「孝文帝方受釐、坐宣室（孝文帝 方に釐を受け、宣室に坐す）」とある。

「二問」句 王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」詩に、「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺（洛陽の親友 如し相問はば、一片の冰心 玉壺に在り）」とある。あるいはこの句をふまえているのだろうか。

慶曆二年 一〇四二年。慶曆は仁宗の年号。一〇四一年～一〇四八年。 綴 長い刃の矛。 韓欽聖 韓宗彦、字は欽聖。第四節の注を参照。 『勳門賜立戟』詩

『全宋詩』巻二六（第四冊二六五三頁）に、この二句のみ収録。ただし、「鍛」を「鍛」に作る。 范景仁 范鎮（一〇〇八～一〇八九）、字は景仁。司馬光の友人。詳しくは、第二十五節を参照。

丁儻 蘇州の人。仁宗の嘉祐四年（一〇五九）の進士。『全宋詩』巻六七（第十二冊七八四三頁）に、ここに引用される詩一首のみが掲載されている。

邇英 邇英閣。宋代の禁苑の宮殿の名。 白虎 白虎観。後漢の時代に博士・諸儒生がここに会し、五經の異同を議論しあつた。

前芳 「芳」は、賢徳の人、の意。ここでは、後漢の博士たちを指す。 金華 金華殿。『漢書』巻一百「叙伝上」に、

「鄭寛中・張禹、朝夕入説尚書・論語於金華殿中（鄭寛中・張禹、朝夕入りて『尚書』『論語』を金華殿中に説く）」とある。

天心 君主の御心。 **垂意** 天子の威徳を人民に及ぼす。

心を配る。『後漢書』卷四「和帝紀」に、「垂意黎民（意を黎民に垂る）」とある。 **蒼生** 百姓。人民。 **藝名** 科擧の試験で、礼部が採用しようとしている進士の名簿を、皇帝に差し出し、審査をおおぐこと。 **滕元發甫** 滕甫、字は元發。

皇祐五年に進士に及第。知制誥・知諫院・御史中丞などを歴任。

皇祐五年 一〇五三年。皇祐は、仁宗の年号（一〇四九年～一〇五三年）。 **「律聽軍聲」詩** 『全宋詩』卷五一八

（第九冊六三〇一頁）に、「句」として二句が収録されている。

なお、宋・李頎の『古今詩話』第一四三節「宋初諸進士省試詩」にも、同様の話が載せられており、この詩の二句も引用されているが、詩題を「吹律聽軍聲詩」に作る。 **奏凱** 戦いに勝つて、功績をたたえ合うこと。 **凱歌** を奏すること。 **場屋** 科擧の試験場。

【現代語訳】

科擧の試験場で出題される詩は、宋朝の建国以来、良いものが少ない。天聖年間に、梓州の進士楊諤が、やっと詩によって著名となった。その天聖八年の省試における「蒲車」の詩に、「草は皇帝の車が揺れないように守り、山は陛下の車を守っている」とある。この年は、答案に天子の御下問の文字を用いたことよって落第した。景祐元年、省試で出題された「宣室で釐を受ける」の詩に、「できることなら、聡明なる天子様の御

前に進み出て、一たび洛陽の人に尋ねられたいものだ」とある。楊諤はこの年合格したが、ほどなくして世を去った。

慶曆二年、韓欽聖は「勳門で立戟を下賜する」という題の詩を出題されて、「峰を集めたかのように絵模様のある旗はいくつも連なり風に翻り、矛先を交えたあたりに彩りのある矛の枝刃は柄に繋るかのよう」と答えた。范景仁が言つには、「以前原本を見たが、この通りであった」とのことである。韓欽聖の作と伝えられるものに、「風を受けて絵模様のある旗は翻り、日に映じて彩りのある矛の枝刃は柄に繋るかのよう」というのがある。それゆえ両方ともこれを記録しておく。

蘇州の進士丁偃は、「邇英閣に招かれて学芸を講ずる」という詩を出題されて、「邇英閣での講義のすばらしさは（白虎觀における先人たちの立派な議論をも覆い尽くし、金華殿におけるいにしへの講義も色あせるほどである。天子様の御心は、すでに悟っていらっしやることでしょう、お気持ち配るのは民百姓に対してであるべきことを」と答えた。古詩の諷諫の体がある。丁偃はこの年天子に差し出された名簿での評価が大変高かったが、殿試で落第した。それから二十年してようやく合格したが、間もなく世を去った。

滕甫、字は元發は、皇祐五年「律の笛を吹いて軍楽を聴く」という詩を出題されて、「国境の外側の国々はすべて戦いをやめ、群衆は凱歌を奏する中にいる」と答えた。これよって第三位での合格を授かり、その詩は科擧の試験場で最も称賛された。

六

鮑當善爲詩、景德二年進士及第、爲河南府法曹。薛尚書映知府、當失其意、初甚怒之、當獻孤雁詩云、「天寒稻梁少、萬里孤難進。不惜充君庖、爲帶邊城信」。薛大嗟賞、自是游宴無不預焉、不復以掾屬待之。時人謂之「鮑孤雁」。

薛嘗暑月詣其廡舍、當方露頂、狼狽入、易服、把板而出、忘其幞頭。薛嚴重、左右莫敢言者。坐久之、月上、當顧見髮影、大慚、以公服袖掩頭而走。

【訓読】

鮑當 善く詩を爲り、景德二年進士に及第し、河南府の法曹と爲る。薛尚書映 府に知たり。當 其の意を失ひ、初め甚だ之を怒る。當「孤雁」の詩を獻じて云はく、「天寒く稻梁少なく、万里 孤にして進み難し。惜しきま 君が庖に充てらるるを。爲に帯ぶ 辺城の信」と。薛 大いに嗟賞し、是れより游宴 焉に預らざること無く、復た掾屬を以て之を待せず。時人 之を「鮑孤雁」と謂ふ。

薛嘗て暑月に其の廡舎に詣るに、當 方に頂を露す。狼狽して入り、服を易へ、板を把りて出づるに、其の幞頭を忘る。薛嚴重にして、左右 敢て言ふ者莫し。坐すること之を久しくし、月上る。當 髮影を顧見し、大いに慚ち、公服の袖を以て頭を掩ひて走へ。

鮑當 鮑當（？～一〇三八）、臨安の人。真宗の景德二年（一〇〇五）の進士で、河南法掾となった。『宋史』に伝なし。

薛映 薛映（九五～一〇二四）、字は景陽、華陽（今の四川省成都）の人。太宗の太平興国年間の進士。真宗の時に知河南府となり、昇州・揚州などの知事を歴任した後、仁宗の時に礼部尚書に移った。『宋史』巻三〇五に伝がある。

充君庖 「礼記」「王制」に、「三爲充君之庖（三は君が庖に充つる爲なり）」とある。

邊城信 蘇武の故事をふまえる。

【現代語訳】

鮑當は詩を作るのが上手で、景德二年に進士に合格し、河南府の法曹となった。後に尚書となった薛映は、この時河南府の知事であった。鮑當がその機嫌を損ねてしまったため、薛映ははじめ大変これに腹を立てていた。そこで鮑當は薛映に「孤雁」の詩を献呈して、次のように詠った。「寒空でえさとなる穀物はほとんどなく、万里の彼方までたった一羽で飛んで行くのは大変難しいことです。あなた様の厨房で料理されることになっても構いません。あなた様のための、辺境の町からの手紙を身に帯びて運んで来たのですよ」。薛映は、大いに賛嘆した。それ以来、鮑當は常に遊宴に加わるようになり、薛映はもはや鮑當を部下として扱うことはなかった。当時の人は、彼を「鮑孤雁」と呼んだ。

薛映がある時、暑い月に鮑當の官舎を訪ねたところ、彼はちょうど頭を露出していた。あわてて部屋の中に入り、服を着替え、

笏板を手にして出て来たが、幘頭をかぶるのを忘れてしまった。薛映は厳しい人であったため、周囲の者は誰もそのことを忠告できなかった。長いこと座っていて、月が出た。鮑当は頭髪の影響を見て、大いに恥じ、正装の服の袖で頭を覆い隠して走り去った。

七

林逋處士、錢塘人、家于西湖之上、有詩名。人稱其梅花詩云、「疏影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」。曲盡梅之體態。

【訓読】

林逋處士は、錢塘の人なり。西湖の上に家し、詩名有り。人其の梅花の詩に「疏影 横斜して 水清浅、暗香 浮動して 月黄昏」と云ふを称心。曲さに梅の体態を尽くす。

林逋 林逋（九六七～一〇二八）、字は君復、謚号は和靖先生。杭州錢塘（今の浙江省杭州市）の人。若くして身寄りがなく貧乏で、刻苦して学問に励んだ。一生役人になることを望まざ、西湖のほとりの孤山に隠居して、二十年の間、町に足を踏み入れることがなかった。生まれつき病弱で、生涯を独身で過ごし、庭に梅を植え鶴を飼って楽しんだので、当時の人々はこれを「梅妻鶴子」と言った。「林和靖先生詩集」がある。「宋史」巻四五七に伝がある。「橄欖」第二号（一一五頁）参照。

梅花詩 林逋の代表作として知られる七言律詩「山園小梅」をさす。「全宋詩」巻一〇六（第二冊二二七頁）では、詩題を「山園小梅二首」とする。以下に引用されているのは、其一の頷聯の二句である。

【現代語訳】

林逋處士は、錢塘の人である。西湖のほとりに家を構え、詩人として名高い。人々は、その「梅花」の詩の「清く浅い水面に、まばらな枝の影が斜めに横たわり、月の輝く黄昏どきに、ほのかな香りが漂い流れる」という句をほめた。梅の姿態を、余す事なく表現している。

八

魏野處士、陝人、字仲先、少時未知名。嘗題河上寺柱云、「數聲離岸櫓、幾點別州山」。時有幕僚、本江南文士也、見之大驚、邀與相見、贈詩曰、「怪得名稱野、元來性不羣。借冠來謁我、倒屣起迎君」。仍爲延譽、由是人始重之。其詩效白樂天體。

眞宗西祀、聞其名、遣中使召之、野閉戸踰垣而遁。王太尉相旦從車駕過陝、野貽詩曰、「昔年宰相年年替、君在中書十一秋。西祀東封俱已了、如今好逐赤松遊」。王袖其詩以呈上、累表請退、上不許。

野又嘗上寇萊公準詩云、「好去上天辭將相、却來平地作神仙」。又有啄木鳥詩云、「千林蠹如盡、一腹餒何

妨」。又竹杯琰詩云、「吉凶終在我、反覆謾勞君」。有詩人規戒之風。

卒、贈著作郎、仍詔子孫租稅外、其餘科役、皆無所預。仲先詩有「妻喜栽花活、童誇鬥草贏」。眞得野人之趣、以其皆非急務也。

仲先詩有「燒葉爐中無宿火、讀書窗下有殘燈」。仲先既没、集其詩者嫌「燒葉」貧寒太甚、故改「葉」爲「藥」、不惟壞此一字、乃併一句亦無氣味、所謂求益反損也。

仲先贈先公詩、有「文雖如貌古、道不似家貧」。先公監安豐酒稅、赴官、嘗有行色詩云、「冷于陂水淡于秋、遠陌初窮見渡頭。猶賴丹青無處畫、畫成應遣一生愁」。豈非狀難寫之景也。

【校異】

「昔年」は、学海類編本では「昔時」に作る。

【訓読】

魏野処士は、陝の人なり。字は仲先、少き時、未だ名を知られず。嘗て河上の寺の柱に題して云はく、「数声岸を離るるの櫓、幾点州に別るるの山」と。時に幕僚有り、本と江南の文士なり。之を見て大いに驚き、邀へて与に相ひ見て、詩を贈りて曰く、「怪しみ得たり名づけて野と称するを。元来性群せず。冠を借りて来たりて我に謁せば、屣を倒にして起ちて君を迎へん」と。仍りに爲に誉れを延べ、是れより人始めて之を

重んず。其の詩白樂天の体に效ふ。

眞宗 西祀するに、其の名を聞き、中使を遣はして之を召さしむるに、野戸を閉じ垣を踰えて遁く。王太尉相旦車駕に従ひて陝を過るに、野詩を貽りて曰く、「昔年の宰相 年年替はり、君 中書に在ること十一秋。西祀 東封 俱に已に了る。如今 好しく赤松を逐ひて遊ぶべし」と。王其の詩を袖にして以て上に呈し、累ねて表して退かんことを請ふも、上許さず。

野 又た嘗て寇萊公準に詩を上りて云はく、「好しく上天を去りて将相を辞し、却つて平地に来たりて神仙と作るべし」と。又た「啄木鳥」の詩有りて云はく、「千林 盡 尽くるが如きも、一腹 餒 何ぞ妨げん」と。又た「竹杯琰」の詩に云はく、「吉凶終に我在り、反覆 謾りに君を勞す」と。詩人規戒の風有り。

卒して、著作郎を贈らる。仍ねて詔し、子孫租稅の外、其の余の科役は、皆な預る所無からしむ。仲先の詩に、「妻は花を栽えて活くるを喜び、童は草を鬪はして羸つを誇る」なるもの有り。眞に野人の趣を得たるは、其の皆な急務に非ざるを以てなり。

仲先の詩に、「葉を焼きて爐中に宿火無く、書を読みて窓下に残灯有り」なるもの有り。仲先 既に没し、其の詩を集むる者「燒葉」の貧寒なること太甚しきを嫌ひ、故に「葉」を改めて「葉」と爲す。惟だに此の一字を壊すのみならず、乃ち一句を併せて亦た気味無し、所謂「益を求めて反つて損なふ」ものなり。

仲先の先公に贈る詩に、「文は貌の古なるが如しと雖も、道

は家の貧しきに似ず」なるもの有り。先公安豊の酒税を監し、官に赴く。嘗て「行色」の詩有りて云はく、「陂水よりも冷たく秋よりも淡く、遠陌 初めて窮まり渡頭を見る。猶ほ頼ひに丹青も画く処無し。画成れば応に一生をして愁へしむべし」と。豈に写し難きの景を状するに非ずや。

魏野 魏野（九六〇～一〇二〇）、字は仲先、号は草堂居士、陝州陝東（今の河南省に属する）の人。『宋史』巻四五七に伝がある。詩は『全宋詩』巻七八～卷八七（第二冊）に収録されている。「**數聲**」二句 五言律詩「題崇勝院河亭」の頷聯。

『全宋詩』巻七八（第二冊八九八頁）。**「倒雁」**句 後漢の蔡邕が王粲を出迎えた時に、あわてて履物を逆さに履いたという故事による。『三國志』巻二「魏書・王粲伝」。 **眞宗**

北宋の第三代皇帝。在位九九七～一〇二二。 **西祀** 西方の汾陰の神を祀る儀式。『宋史』巻四五七「魏野伝」参照。

王旦 王旦（九五七～一〇一七）、字は子明、大名莘県（今の山東省に属する）の人。太宗の太平興国五年（九八〇）の進士。眞宗が即位すると、中書舍人・翰林字士となった。『宋史』巻二八二に伝がある。 **「昔年」**詩 七言絶句「太保瑯琊相公

見惠酒因成二絶用爲紀謝」（『全宋詩』巻八〇、第二冊九一〇頁）。ただし、『全宋詩』に載せるものは、文字の異同がかなりある。 **寇準** 寇準（九六一～一〇二二）、字は平仲、華州下邳（今の陝西省渭南県）の人。北宋の宰相で、萊国公に封ぜられた。『宋史』巻二八一に伝がある。「**橄欖**」第一号参照。

「千林」二句 五言律詩「啄木鳥二首」其一の頷聯。全

宋詩』巻八六（第二冊九五五頁）。 **竹杯琺瑯** 『全宋詩』

巻八二（第二冊九二四頁）では、詩題を「詠竹杯琺瑯」に作る。「吉凶」二句は、五言律詩の頷聯。竹杯琺瑯は、竹製の占いのための道具。竹杯を放り投げて、その裏表によって吉凶を占う。

鬥草 鬥百草ともいう。旧暦五月五日の端午の節句に、草を採ってその多寡優劣を競う遊戯。 **先公** 司馬光の亡父、

司馬池（九八〇～一〇四一）、字は和中。景德二年（一〇〇五）の進士。 **「文雖」**二句 五言律詩「貽司馬池」の頷聯。

『全宋詩』巻八一（第二冊九二六頁）。 **「行色」** 司馬池の七言絶句。『全宋詩』巻一四六（第三冊一六三二頁）。なお、

『全宋詩』巻八七（第二冊九六八頁）では、誤って魏野の七言絶句としても収録されている。ただし、文字の異同が多い。

「猶頼」二句 「猶ほ丹青に頼りても画く処無きがごとし。画成れば応に一生の愁ひを遣るべし」と訓読し、「この風景は（絵の具で描けそうにもない。もしも絵にできたならば一生の愁いをはらすことができるだろう」と解釈することもできるかも知れない。

【現代語訳】

魏野処士は、陝の人である。字は仲先といい、若い時はまだ名前を知られていなかった。かつて河のほとりの寺の柱に、「船は数回の櫓を漕ぐ音と共に岸より離れ、幾つかの山が、州より別れ行く船を見送るかのよう」に点在している」という詩を書き付けた。時に幕僚がいて、元は江南の文士であった。これを見て大変驚き、魏野を招き入れて面会し、「はじめは『野

と名乗っていることを不思議に思っていました。なるほど「野」という名前にふさわしい、人と群れ交わらない性格の人であったのです。あなたが冠を借りて（正装して）私のもとを訪ねていらつしやるならば、履物をさかさまにして立ち上がり、あなたをお迎えしましょう」という詩を贈った。しきりに魏野のために周囲に広く称賛し、それ以後、人々はやつと彼を重んじるようになった。その詩は、白楽天の詩の体にならっている。

真宗が西方の神を祀る儀式を行おうとした際に、魏野の名を聞きつけ、使者を派遣して彼を召し出させようとしたところ、魏野は家の門を閉じ、垣根を越えて逃げた。宰相の王旦が天子の乗る車に付き従って陝を通りかかった時に、魏野は彼に詩を贈り、「その昔、宰相は毎年のように交替しましたが、あなた様は中書舎人の位にあること十年になります。西の地の神の祀りも、東の地の封禪の儀式も、ともにすでに終わりました。これからは、仙人の赤松子の後を追って仙界に遊ばれたらよろしいでしょう」と詠った。王旦はその詩を袖の中に入れて天子に献上し、何度も辞表を提出して引退することを請願したが、天子は認めなかった。さらにまた魏野はかつて萊公寇準に、「天上の世界を去って宰相を辞職し、平地にお戻りになって神仙となるのがよろしいでしょう」という詩を献上した。

また「啄木鳥」の詩があって、「林という林の木食虫は、ほとんど食べ尽くされてしまったようなのに、一羽のキツツキのお腹のひもじさをどうして癒すことができようか」と詠っている。また「竹の杯投」の詩に、「吉凶は結局私自身にあるのに、

やたらと何度も君をわずらわせることだ」と詠っている。「詩経」の詩人の諷諫の趣がある。

死後、著作郎を贈られた。子孫は、租税を払う以外の賦役は、すべて免除するとの詔が、重ねて下された。魏野の詩に、「妻は花を植えてうまく育つたのを喜び、子供は鬪草の遊びに勝つたのを自慢する」というものがある。真に在野の人の趣を得ているのは、詠われている事柄が、いずれも急務ではないからである。

魏野の詩に、「落ち葉を焼いて囲炉裏の中には残り火がなく、書物を読んで窓の下には消えかかった灯がある」というものがある。魏野が没した後、その詩を集めた者が「焼葉」という語があまりにも貧寒過ぎることを嫌い、そこで「葉」を「葉」に改めた。これは、ただこの一字を台なしにするだけではなく、一句全体をも味気無いものにしてしまう行為であり、いわゆる「角をためて牛を殺す」というものである。

魏野が私の亡父に贈った詩に、「文は古風な容貌に似ているが、道は家が貧しいには似ていない」というものがある。亡父が安豊の酒税を監督する役人となり、任に赴いた時のこと、「行色」の詩を作り、「堤の水よりも冷たく、そして秋よりも淡く、遠くまで続くあぜ道がようやく尽きる所に、渡し場が見える。幸いなことに、この景色を絵の具で描いた者はいない。もし絵ができあがったとすれば、きっと人を一生愁えさせることになるだろう」と詠った。描きにくい情景を、たくみに言い表したものと言えないだろうか。

九

丁相謂善爲詩、在珠崖猶有詩近百篇、號『知命集』、其警句有「草解忘憂憂底事、花能含笑笑何人」。少時好蹴鞠、長韻其二聯云、「鷹鵠騰雙眼、龍蛇繞四肢。躡來行數步、蹠後立多時」。

【訓読】

丁相謂 善く詩を為る。珠崖に在りても猶ほ詩有り、百篇に近し。『知命集』と号す。其の警句に、「草は解く憂ひを忘る底事をか憂へん。花は能く笑みを含む 何人をか笑はん」なるもの有り。少き時 蹴鞠を好み、長韻の其の二聯に云はく、「鷹鵠のごとく双眼を騰げ、龍蛇のごとく四肢を繞らす。躡み来りて行くこと数歩、蹠ぐる後立つこと多時」と。

丁謂 丁謂(九六六～一〇三七)、字は謂之。『宋史』卷二八三に伝がある。池澤滋子著『丁謂研究』(巴蜀書社、一九九八年)に年譜がある。罪を得て崖州(海南島)に流された。『宋史』卷二〇八「芸文志」によれば、『丁謂集』八卷・『虎丘集』五十卷・『刀筆集』二卷・『青衿集』三卷・『知命集』一卷があったがすべて散逸した。現在では一二六首が残っており、『全宋詩』卷一〇一～一〇二(第二冊)に収録されている。 珠崖 海南島の南端の地。『草解』二句 『全宋詩』卷一〇一(第二冊一四六頁)に収録される七言律詩「山居」の頸聯。

忘憂 ここでは、草の名前でもある。 含笑 花の名前

丁謂の自注に、「海南有含笑花」とある。含笑花は、別名を香蕉花ともいい、木蘭科の常緑喬木に属する。花は芳香を発し、淡黄色。広東・福建原産。 長韻 ここでは律詩のことである。 『鷹鵠』四句 『全宋詩』卷一〇二(第二冊一六八頁)に、断句として収録されている。若干の文字の異同あり。

『宋詩話全編』(江蘇古籍出版社)第二冊『阮閱詩話』卷二一、九一六条に引用された『古今詩話』には、次のようにある。 『鞠蹴惟柳三復能之、丁晉公亦好焉。晉公詩曰、「背裝花屈膝、白打大廉斯。進前行兩歩、蹠後立多時」。

【現代語訳】

宰相であった丁謂は詩を作るのが上手で、珠崖に流された時になおも百篇近い詩を作り、『知命集』と名づけた。その警句に、「草は憂いを忘れることができるというが、いったい何を憂えるというのか。花は微笑むことができるというが、いったい誰に微笑みかけるといふのか」というものがある。丁謂は若い時にけまりを好み、長韻の二つの聯に、「鷹や隼のように両目をつり上げ、竜や蛇のように四肢をめぐらせる。地面を踏みしめて歩むこと数歩、鞠を蹴り上げた後で立つことしばし」とある。

十

寇萊公詩、才思融遠。年十九進士及第、初知巴東縣、

有詩云、「野水無人渡、孤舟盡日横」。又嘗爲江南春云、「波渺渺、柳依依、孤村芳草遠、斜日杏花飛。江南春盡離腸斷、蘋滿汀洲人未歸」。爲人膾炙。

【訓読】

寇萊公（こうらいこう）の詩、才思融遠たり。年十九にして進士に及第し、初め巴東県に知たり。詩有りて云はく、「野水人の渡る無く、孤舟 尽日横たはる」と。又嘗て「江南の春」を爲りて云はく、「波は渺渺たり、柳は依依たり。孤村 芳草遠く、斜日 杏花飛ぶ。江南 春尽きて 離腸 断たれ、蘋 汀洲に満ちて 人 未だ帰らず」と。人の膾炙するところと爲る。

寇萊公 寇準のこと。第八節の注を参照。 『野水』二句

五言律詩「春日登樓懷歸」の頷聯。『全宋詩』卷九〇（第二冊一〇〇一頁）。『全宋詩』は、「野」を「遠」に作る。

『江南春』 『全宋詩』卷八九（第二冊九九七頁）に収録。

渺渺 水面が広々として果てしないさま。 依依 木の枝がなよやかに風になびくさま。

【現代語訳】

萊公寇準の詩は、詩情が幽遠である。十九歳で進士に合格し、最初、巴東県の知事となった。その時の詩に、次のようにある。「野を流れる川には渡る人の姿もなく、ぼつんと一そこの小舟が、一日中横たわっているばかり」。またある時「江南の春」という詩を作り、次のように詠った。「波ははるばると、柳は

ゆらゆらと。ぼつんとある村里はかくわしい草が遠くまで広がり、夕陽の中をアンスの花が飛んでいる。江南の春は終わって、別れの悲しみにはらわたは断ち切れんばかり。浮き草は中州に満ちて、旅に出た人はまだ帰らない。これは、当時人口に膾炙した。

十一

陳文惠公堯佐能爲詩。世稱其吳江詩云、「平波渺渺 烟蒼蒼、菰蒲纒熟楊柳黃。扁舟繫岸不忍去、秋風斜日 鱸魚香」。又嘗有詩云、「雨網蛛絲斷、風枝鳥夢 搖。詩家 零落の景、采拾合如樵」。

【訓読】

陳文惠公堯佐 能く詩を爲る。世 其の吳江の詩に、「平波渺渺として 烟 蒼蒼たり、菰蒲 纒かに熟し 楊柳 黄なり。扁舟 岸に繋がれて去るに忍びず、秋風 斜日 鱸魚 香る」と云ふを 稱ふ。又嘗て詩有りて云はく、「雨網 蛛糸 断え、風枝 鳥夢 揺る。詩家 零落の景、采拾すること 合に樵の如くなるべし」と。

陳文惠公堯佐 陳堯佐（九六三丁一〇四四）、字は希元、号は知余子。閩州閩中（今の四川省に属する）の人。太宗の端拱元年（九八八）の進士。没後に文惠と諡された。『宋史』卷二八四に伝がある。『全宋詩』卷九七（第二冊）は、その詩五十

首を収録している。 吳江詩 『全宋詩』 卷九七（第二冊一〇八五頁）に収録。 鱸魚香 范成大 『吳郡志』 卷一八及び『全宋詩』、いずれも「鱸魚郷」に作る。 「雨網」四句 『全宋詩』 卷九七（第二冊一〇九二頁）に、「詩一首」として収録されている。

【現代語訳】

文惠公の陳堯佐は、詩を作るのが上手であった。世間の人々は、その「吳江」の詩に、次のようにあるのをほめたたえた。「おだやかな波ははるばると、もやがすみはあたり一面に広がっている。マコモはよつやく熟し、柳の葉は黄色に色づいている。小舟は岸につながれたままで、立ち去るにしのびない。秋風の吹く夕暮れ時、鱸魚の香りが漂う」。またある時、次のような詩を作った。「網に雨が降り蜘蛛の糸は断たれ、枝に風が吹き夢を見ていた鳥は揺り起こされる。詩人たる者は、このようなわびしい情景を、あたかも木こりが木々を拾い集めるかのようには詠わなければならない」。

十二

龐穎公籍喜爲詩、雖臨邊典藩、文案委積、日不廢三兩篇、以此爲適。及疾亟、余時爲諫官、以十餘篇相示、手批其後曰、「欲令吾弟知老夫病中嘗有此思耳」。字已慘淡難識、後數日而薨。

【訓読】

龐穎公籍 喜みて詩を爲り、辺に臨み藩を典り、文案委積すと雖も、日に三兩篇を廢せず、此れを以て適と爲す。疾亟かなるに及び、余時に諫官たり、十余篇を以て相ひ示し、手づから其の後に批して曰く、「吾が弟をして、老夫病中にて嘗て此の思ひ有るを知らしめんと欲するのみ」と。字已に慘淡として識り難く、後數日にして薨す。

龐穎公籍 龐籍（九八八―一〇六三）、字は醇之、單州成武（今の山東省）の人。真宗の大中祥符八年（一〇一五）の進士。穎国公に封ぜられた。『宋史』卷三一一に伝がある。『全宋詩』卷一六三（第三冊一八四八頁）に、詩八首が収録されている。 吾弟 二人称。ここでは司馬光をさす。

【現代語訳】

穎公の龐籍は詩を作るのが好きで、辺地に臨み地方の行政をつかさどり、書類が山積みになっても、毎日二三首の詩を作ることをやめず、これを楽しみとしていた。病気が重くなつた時に、私はその当時諫官であったが、（龐籍は）十数首の詩を私に示し、手づからその後に次のような批語を記した。「この年寄りだが、かつて病中でこのような思いを抱いていたことを、あなたに知らせたいと思つたまでです」。字はすでに乱れかすれて識別するのが難しく、その後數日で亡くなつた。

十三

韓退處士、絳州人、放誕不拘、浪跡秦晉間、以詩自名。嘗跨一白驢、自有詩云、「山人跨雪精、上便不論程。嗅地打不動、笑天休始行」。爲人所稱。好著寬袖鶴氅、醉則鶴舞、石曼卿贈詩曰、「醉狂玄鶴舞、閒臥白驢號」。

【訓読】

韓退処士は、絳州の人なり。放誕不拘にして、秦晋の間に浪跡し、詩を以て自ら名あり。嘗て一白驢に跨り、自ら詩有りて云はく、「山人雪精に跨り、上れば便ち程を論ぜず。地を嗅げば打つとも動かず、天に笑へば休めて始めて行く」と。人の称ふる所と爲る。好みて寬袖の鶴氅を著け、酔へば則ち鶴舞す。石曼卿詩を贈りて曰く、「醉狂すれば玄鶴のごとく舞ひ、閒臥すれば白驢のごとく号す」と。

韓退處士 韓退、字は知止。絳州稷山（今の山西省に属する）

の人。『宋史』卷四五七「隱逸上・高懷仁」に付随する形で、事跡が簡単に紹介されている。その詩は『全宋詩』卷一二七（第三冊一四八二頁）に、この一首のみが収録されている。

鶴氅 鳥の羽毛で作った上着。外套として用いる。また、道士の衣服。 石曼卿 石延年（九九四～一〇四一）、字は曼卿、一に字は安仁。『宋史』卷四四二に伝がある。『全宋詩』卷

一七六（第三冊二〇〇頁）に詩が収録されている。「醉狂」二句 石延年の五言律詩「韓希祖隱君武威」の頸聯。『全宋詩』卷一七六（第三冊二〇〇頁）。『全宋詩』は、「號」を「豪」に作る。

【現代語訳】

韓退処士は、絳州の人である。奔放な性格で細かいことにとだわらず、陝西から山西の間を放浪し、詩によっておのずから名声があつた。ある時、一頭の白い驢馬にまたがり、次のような詩を作つた。「山に住む隠者は雪の精のような白い驢馬にまたがり、ひとたび驢馬の背中に上ると、行程の遠近など気にならない。驢馬が地面をかくと、たたいても動かなくなり、天を仰いで笑うと、かくのをやめてようやく歩き出す」。この詩は、人にほめたたえられた。好んで袖の広い鶴氅を着、酒に酔つと鶴の舞いを踊つた。石曼卿が彼に次のような詩を贈つた。「酒に酔えば黒い鶴のように舞い、のんびりと寝れば白い驢馬の鳴きまねをする」。

十四

章獻太后上仙、羣臣進挽歌數百首、惟曼卿一聯首出、曰、「震出坤柔變、乾成太極虛」。太后稱制曰、仁宗端拱、至是始親萬幾、曼卿詩切合時宜、又不卑長樂也。

【訓読】

章献太后 上仙し、群臣 挽歌数百首を進む。惟だ曼卿の一聯のみ首に出て曰く、「震 出て 坤 柔変し、乾 成りて 太極 虚し」と。太后 称制の日、仁宗 端拱し、是に至りて始めて万幾を親らす。曼卿の詩 切に時宜に合し、又た長樂を卑しめざるなり。

章献太后 章献明肅劉皇后。『宋史』卷二四二「后妃伝」。子供がなかったため、李宸妃の生んだ仁宗を養子として育てた。

明道元年（一〇三二）六十五歳で亡くなった。時に仁宗は二十二歳であった。劉皇后に先立ち、同じ年に李宸妃も亡くなっている。仁宗は、この時初めて実の母が李氏であることを知ったという。上仙 貴人が亡くなること。曼卿 石延年、字は曼卿。第十三節の注を参照。震 『易』の卦の一つ。一つの陽が二つの陰に抑えられていて、憤激して出ようとするさま。坤 『易』の卦の一つで、陰が六つ重なる形。地を表す。ここでは、太后を表す。柔變 ここでは、太后が亡くなったことを象徴する。乾 『易』の卦の一つで、陽が六つ重なる形。天を表す。ここでは、仁宗を表す。太極 宇宙の根源。ここでは、それまで政治を行っていた太后をさすのである。稱制 政治を取り仕切ること。仁宗 北宋の第四代皇帝。在位一〇二二—一〇六三。『宋史』卷九十一。

端拱 かたわらに拱手して仕える。長樂 宮殿の名前。ここでは、太后をさす。

【現代語訳】

章献太后が亡くなり、群臣たちは挽歌数百首を献呈した。ただ石曼卿の詩の一聯だけが、初めに紹介された。その詩に次のようにある。「震の卦が出て坤の卦が柔らかく変じ、乾の卦が成就して太極は空っぽになった」。太后が天子に代わって政治を行っていた時、仁宗はそのそばに恭しく仕えていたが、ここに至ってはじめて、みずからすべての政務を取り仕切ることになった。石曼卿の詩は当時の状況に実にうまく合致している上に、太后を卑しめてもいないのである。

十五

李長吉歌「天若有情天亦老」、人以爲奇絶無對。曼卿對「月如無恨月長圓」、人以爲勅敵。

【訓読】

李長吉の歌に「天若し情有らば天も亦た老いん」とあり、人以爲らく、奇絶にして對する無からんと。曼卿對して、「月如し恨み無くんば月長に円ならん」と。人以て勅敵と爲す。

李長吉 李賀（七九一—八一七）、字は長吉。中唐の詩人。

「天若」句 李賀の七言古詩「金銅仙人辭漢歌（金銅仙人漢を辭するの歌）」の第十句。『全唐詩』卷三九一。曼卿 石延年、字は曼卿。第十三節の注参照。「月如」句

『全宋詩』卷一七六（第三冊二〇一〇頁）に、「句」として単独

で紹介されている。

【現代語訳】

李賀の詩に、「天にもし心があれば、天もまた年老いるだろう」という句があり、人々は非常にすばらしい句で、これに對の句を作ることではできないだろうと思っていた。ところが石延年は、「月にもし無念の思いがなければ、月は永遠に丸いだろう」という對の句を作った。人々は、李賀の句に勝るとも劣らない名句だと思った。

十六

詩云、「牂羊墳首、三星在罅」。言不可久。古人爲詩、貴于意在言外、使人思而得之、故言之者無罪、聞之者足以戒也。近世詩人、惟杜子美最得詩人之體、如「國破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心」。山河在、明無餘物矣。草木深、明無人矣。花鳥、平時可娛之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。他皆類此、不可徧舉。

【訓読】

詩に云はく、「牂羊墳首、三星は罅に在り」と。久しかるべからざるを言ふ。古人詩を爲るに、意は言外に在りて、人をして思ひて之を得しむるを貴ぶ。故に之を言ふ者は罪無く、之を聞く者は以て戒めとするに足るなり。近世の詩人、惟だ杜子

美のみ最も詩人の体を得たり。「国破れて山河在り、城春にして草木深し。時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥にも心を驚かす」のごとし。「山河在り」とは、余物無きを明らかにするなり。「草木深し」とは、人無きを明らかにするなり。花鳥は、平時娛しむべきの物なるも、之を見て泣き、之を聞き悲しむ、則ち時知るべきなり。他皆な此れに類し、徧くは挙ぐるべからず。

詩

『詩経』をさす。「牂羊」二句 『詩経』小雅・魚藻之什「苕之華」に見える詩句で、周王朝の衰亡を詠った詩とされる。訳は、福島吉彦著『詩経・楚辞』（鑑賞中国の古典）角川書店、一九八八年二月）による。「言之」一文

『毛詩』大序に見える言葉。杜子美 杜甫（七一二～七七〇）、字は子美。盛唐の詩人。「國破」四句 杜甫の五言律詩「春望」の前半。『全唐詩』卷二二四。

【現代語訳】

『詩経』の詩に、「牂羊はやせて首ばかりが大きく、三つ星は筈に影をおとす」とある。（これは、周王朝が）長くは続かないことを言っているのである。古人が詩を作る際には、意味は言外にあつて、そこに込められた意味を人に悟らせることを尊んだ。それゆえ、「これ（詩）を言う者には罪がなく、これを聞く者は戒めとするに足る」のである。近世の詩人の中では、ただ杜甫だけが最も詩人としての体を得ている。たとえば、「国都は破壊されたが、山河はもとのままであり、長安城には

また春がめぐつて来て、草木が深く茂っている。時勢に感じては、花を見ても涙をそそぎ、家族との別れを恨んで、鳥の声を聞いても心をいたませる」のようなものである。「山河はもとのままである」とは、それ以外の物が何も無いことを明らかにしているのである。「草木が深く茂っている」とは、人がどこにもいないことを明らかにしているのである。花や鳥は、平時には楽しむべき物であるが、これを見ては泣き、これを聞いては悲しむというからには、どのような時勢であるかは推して知るべきである。他の詩もみなこれに似たようなものであり、すべてを挙げることはできない。

十七

劉概字孟節、青州人。喜爲詩、慷慨有氣節。舉進士及第、爲幕僚。一任不得志、棄官隱居治原山*、去人境四十里。好遊山、常獨挈飯一甕、窮探幽險、無所不至、夜則宿于巖石之下、或累日乃返、不畏虎豹蛇虺。富丞相甚禮重之。嘗在府舍西軒有詩云、「昔年曾作瀟湘客、憔悴東秦歸未得。西軒忽見好溪山、如何尚有楚鄉憶。讀書誤人四十年、有時醉把闌干拍。」

【校異】

「治原」はもと「野原」に作るが、「瀟水燕談録」によって改める。

【訓読】

劉概字は孟節、青州の人なり。喜みて詩を爲り、慷慨にして氣節有り。進士に挙げられ及第し、幕僚と爲る。一たび任ぜらるるも志を得ず、官を棄てて治原山に隱居し、人境を去ること四十里。山に遊ぶを好み、常に独り飯一甕を挈け、幽険を窮探し、至らざる所無し。夜には則ち巖石の下に宿し、或は日を累ねて乃ち返り、虎豹蛇虺を畏れず。富丞相甚だ礼して之を重んず。嘗て府舍の西軒に在りて詩有りて云はく、「昔年曾て瀟湘の客と作り、憔悴し東秦歸ること未だ得ず。西軒に忽ち好溪山を見れば、如何ぞ尚ほ楚郷の憶ひ有る。讀書人を誤ること四十年、時有りて酔ひて闌干を把りて拍つ」と。

劉概

生没年不詳。『宋史』には伝がない。『全宋詩』の作者

紹介によれば、神宗の元豐五年（一〇八二）の進士。六年、太学博士となり、通判鄆州となった。『全宋詩』巻一一三（第一九冊一二六二三頁）に、詩二首が収録されている。青州

今の山東省に属する。『全宋詩』によれば、劉概は青州寿州の人。治原山 山東省の臨朐県にある山の名前。富丞

相 北宋の宰相であつた富弼（一〇〇四—一〇八三）のこと。字は彦國、河南洛陽の人。諡は文忠。『宋史』巻三三に伝がある。有詩云 『全宋詩』は、題を「府舍西軒作」とする。

瀟湘 古の楚の地を流れる川の名前。「瀟水と湘水」とする説と、「清らかな湘水」とする説がある。詳しくは、松尾幸忠論文「瀟湘考」（『中国詩文論叢』第十四集、中国詩文研究会、一九九五年）参照。 東秦 山東省一帯をさす。ここでは、

劉概の生まれ故郷の青州をさす。

【現代語訳】

劉概 字は孟節、青州の人である。好んで詩を作り、激情的な性格で、意気と節操を備えていた。進士に推挙されて合格し、幕僚となった。ひとまずは役人となったが志を得ず、官を棄れて冶原山に隠居した。そこは人里を離れること四十里であった。山歩きを好み、いつも一人で一かめの弁当をたすさえ、奥深い険しい場所をくまなく探検し、訪ねない所はなかった。夜には大きな岩の下で野宿をし、時には何日も経つてからようやく帰つて来ることもあり、虎や豹、蛇や蝮を恐れなかった。丞相の富弼は彼をたいそう礼遇して重んじた。劉概はある時、官舎の西の軒で、次のような詩を作った。「その昔、瀟湘の地を旅したことがあり、やつれ衰えて故郷の東秦にまだ帰ることができずにいた。今こうして西の軒でふと美しい山水を目にすると、どうしたことか、なおも楚の地をなつかしむ気持ち湧き起こつて来る。学問に没頭するあまり、四十年もの人生を無駄に過してしまった。酒に酔つては手すりをたたくばかりである」。

十八

唐之中葉、文章特盛。其姓名湮没不傳于世者甚衆。如河中府鶴雀樓有王之渙・暢諸一云暢當詩*、暢詩曰、「迴臨飛鳥上、高謝世人間。天勢圍平野、河流入斷山」。王詩曰、「白日依山盡、黃河徹海流。欲窮千里目、更

上一層樓」。二人者、皆當時賢士所不數、如後人擅詩名者、豈能及之哉。

【校異】

「渙」はもと「美」に作るが、『全唐詩』によつて改める。

【訓読】

唐の中葉、文章特に盛んなり。其の姓名の湮没して世に伝はらざる者甚だ衆し。河中府の鶴雀樓に王之渙・暢諸（一に暢當と云ふ）の詩有るがごとし。暢の詩に曰く、「迴かに飛鳥山に入る」と。王の詩に曰く、「白日山に依りて尽き、黃河海に徹して流る。千里の目を窮めんと欲し、更に上る一層の樓」と。二人は、皆な当時の賢士の数へざる所なるも、後人の詩名を擅にせし者のごときは、豈に能く之に及ばんや。

鶴雀樓

山西省永濟県の西南にあつた樓。

王之渙 『旧

唐書』『新唐書』ともに伝がない。并州の人。玄宗の天宝年間（七四二―七五五）に、王昌齡・崔国輔らと唱和し、詩名があつた。『全唐詩』巻二五三に詩六首が収録されている。暢諸

『新唐書』巻二〇〇に伝がある。『全唐詩』巻二八七に詩一首が収録されている。暢詩 題は「登鶴雀樓」。ただし

『全唐詩』では暢諸の兄の暢当の作として、巻二八七に収録する。『全唐詩』は、「謝」を「出」に、「人」を「塵」に作る。

王詩 題は「登鶴雀樓」。『全唐詩』巻二五三。『全唐詩』

は、「徹」を「入」に作る。

【現代語訳】

唐の中ごろ、詩文はとりわけ盛んであった。その姓名が埋没して世に伝えられていない者は、大変多い。たとえば河中府の鶴雀楼に、王之渙・暢諸（一説に暢當とする）の詩が残されている。暢諸の詩に、次のようにある。「飛ぶ鳥の上からはるかに眺めわたり、高く登って俗世間を離れる。大空は広がって平野をとり囲み、黄河は二つに分かれた山の間流れて行く」。また王之渙の詩に次のようにある。「白く輝く太陽は山に寄り添うように沈んで行き、黄河は海をめざしてまっすぐに流れて行く。私ははるか千里の彼方まで見極めようと思ひ、更にこの楼の上の階へと登って行く」。この二人はいずれも、当時の賢人が詩人として数えていない者たちではあるが、後世の人間で詩名をほしのままにした者などは、とても彼らには及ぶまい。

十九

陳亞郎中性滑稽、嘗爲「藥名詩」百首。其美者有「風雨前湖夜、軒窗半夏涼」、不失詩家之體。其鄙者有「贈之雨自曝僧」云、「不雨若令過半夏、定應喚作胡蘆巴」。又詠上元夜遊人云、「但看車前牛領上、十家皮没五家皮」。

蔡君謨嘗嘲之曰、「陳亞有心終是惡」。亞應聲曰、「蔡襄除口便成衰」。

【訓読】

陳亞郎中性滑稽にして、嘗て「藥名詩」百首を爲る。其の美なる者に、「風雨前湖の夜、軒窓半夏の涼」なるもの有り、詩家の体を失はず。其の鄙なる者に、「雨を乞ひ自ら曝す僧に贈る」なるもの有りて云はく、「雨ふらずして若令し半夏を過ぐれば、定めて喚されて胡蘆巴と作るべし」と。又上元の夜に遊ぶ人を詠じて云はく、「但だ看る車前牛領の上、十家の皮のうち五家の皮没きを」と。

蔡君謨嘗て之を嘲りて曰く、「陳亞心有れば終に是れ悪なり」と。亜声に応じて曰く、「蔡襄口を除けば便ち衰と成ると」。

陳亞郎中 陳亜、字は亜之、維揚（江蘇省揚州）の人。咸平五年（一〇〇二）の進士。宋の呉処厚の『青箱雜記』巻一に、そのエピソードが紹介されている。 藥名詩 六朝時代の文学サロンにおける遊戯文学として誕生したもの。詩の中にあるような藥の名前を詠み込んだ詩。陳亜の「藥名詩」は、今日その大半が失われており、司馬光の詩話及び清の褚人穫の『堅瓠集』甲集巻一に、最も人口に膾炙したという一首と、断片の四聯が伝えられている。『田中謙一著作集』（汲古書院、二〇〇〇年一〇月）第二巻所収の論文「藥名詩の系譜」参照。 「風雨」二句 「前湖（前の湖）」は、藥草の名前の「前胡」と、また「半夏（夏半ば）」は、藥草の名前の「半夏」と、それぞれ掛詞になっている。 「不雨」二句 「若令」は、二文字

で「もしも」の意。「半夏」は前出。「胡蘆巴」は薬草の名前で、「こ」では、「瓢箪がひからびる」と掛詞になっている。「胡蘆」はひょうたん、「巴」はひからびる。南宋の洪邁の『夷堅志』支景卷四「趙胡蘆」の項参照。 詠上元夜遊人 『全宋詩』卷一一三（第二冊一三〇四頁）。前頁「葉名詩」注所掲の田中謙二論文「葉名詩の系譜」によれば、陳亜が祥符県（河南省開封）の令だったころ、なじみの仲間がしょっちゅう彼に頼んで牛馬を借りたので、迷惑のあまり作った詩であるという。

「但看」二句 「車前（車の前）」は、薬草の名前の「車前子」と、また「牛領（牛の首）」は、薬草の名前の「牛領藤」と、それぞれ掛詞になっている。 蔡君謨 蔡襄（一〇二一—一〇六七）、字は君謨、興化仙遊（今の福建省に属する）の人。『宋史』卷三三〇に伝がある。『全宋詩』卷三八五（第七冊四七四五頁）に、詩九首が収録されている。書の中では、蘇軾・黃庭堅・米芾と並んで、「宋四家」と称される。 「陳亞」句 「亞」の字の下に「心」の字を付け加えると、「惡」の字になる、という文字の遊び。『全宋詩』卷三九三（第七冊四八三四頁）。 「蔡襄」句 「襄」の字から「口」の字を取り除くと、「袞」の字になる、という文字の遊び。『全宋詩』卷一一三（第二冊一三〇六頁）。ただし『全宋詩』は、「除」を「無」に作る。両者の句は、即興的に作られたものであるが、平仄も合っており、きちんとした七言の対句になっている。宋の阮閱の『詩話總龜』前集卷四十「諧謔門上」によれば、陳亜がある時蔡君謨と金山の僧舎で出会い、酒がたけなわになった時に、蔡君謨が「陳亞」云々の句を屏風に書き付け、陳亜もすぐに筆

を求めて「蔡襄」云々と応じたのだという。

【現代語訳】

郎中の陳亜はユーモアのある性格で、かつて「葉名詩」百首を作った。その優美なものには、「眼前の湖に、風が吹き雨が降る夜。窓辺には、夏半ば過ぎの涼しさ」というものがあり、詩人らしい風雅な趣を失っていない。その卑俗なものには、「雨乞いをして自分の身体を日にさらす僧に贈る」というものがあって、「もしも雨が降らずに夏半ばを過ぎれば、きつと日干しになってひからびた瓢箪のようになることだろう」と詠っている。また上元節の夜に遊樂する人々を詠って、「ただ車を牽いている牛の首を見れば、十頭の皮のうち五頭の皮が擦り切れてなくなっている」と詠っている。

蔡君謨がある時彼をからかって、「陳亜にもし心があれば、とどのつまりは悪である」と詠った。陳亜はすぐさま言い返して、「蔡襄から口を取れば、すなわち衰となる」と詠った。

二十

楊朴字契玄、鄭州人、善爲詩、不仕。少時嘗與舉相同學、畢薦之、太宗召見、面賦「蓑衣」詩云、「狂脫酒家春醉後、亂堆漁舍晚晴時」。除官不受、聽歸山、以其子從政爲長水尉。朴嘗爲「七夕」詩云、「年年乞與人間巧、不道人間巧已多」。

【訓読】

楊朴 字は契玄、鄭州の人なり。善く詩を為り、仕へず。少き時嘗て畢相と同に学ぶ。畢之を薦め、太宗召見す。面して「蓑衣」詩を賦して云はく、「狂脱す酒家 春酔の後、乱堆す漁舍 晩晴の時」と。官に除せらるるも受けず、山に帰り、其の子從政を以て長水の尉と為すを聴きさる。

朴嘗て「七夕」詩を為りて云はく、「年年乞はれて与ふ人間の巧、道ちはず人間巧已に多きを」と。

楊朴 『宋史』には伝がない。 鄭州 今の河南省に属する。

畢相 畢士安、字は仁叟。『宋史』卷二八一に伝がある。 太宗 北宋の第二代皇帝。在位九七六〜九九七。

蓑衣詩 七言律詩。『瀛奎律髓』卷二十七「看題類」、全宋詩卷二一（第一冊三〇〇頁）に収録。ただし『瀛奎律髓』全宋詩は、共に詩題を「莎衣」に作る。莎衣は布衣の意で、官職に就かないことを表す。

長水 唐代に置かれた河南府の県名。 七夕詩 七言絶句。『千家詩』卷四、『全宋詩』卷二一（第一冊二九九頁）に収録。『年年』句 七夕の時に、針仕事の上達することを祈る習慣があり、これを「乞巧」と呼んだ。

【現代語訳】

楊朴、字は契玄、鄭州の人である。詩を作るのが上手で、仕官しなかった。若い頃、後に宰相となった畢士安と一緒に学んだ。畢士安は彼を推薦し、太宗は彼を召見した。その面前で「蓑衣」詩を賦して、「乱暴に衣を脱ぎ捨て、春の酒場で酒に酔っ

た後、夕晴れの中、漁舎に帰り、蓑を乱雑に放っておく」と詠った。役人に任命されたが受けず、故郷の山に帰り、その子の楊從政を長水の尉とすることを許された。

楊朴はある時「七夕」詩を作り、次のように詠った。「毎年毎年乞われるままに、人の世に針仕事の巧みさを与えているが、思いも寄らなかつた、人の世にはすでにこんなに巧みさが多いとは。」

一一一

劉子儀與夏英公同在翰林、子儀素爲先達。章獻臨朝時、子儀主文、在貢院、閻英公爲樞密副使、意頗不平、作「候子」詩云、「空呈厚貌臨官道、大有人從捷徑過」。

先朝春月、多召兩府・兩制・三館于後苑賞花・釣魚・賦詩。自趙元昊背誕、西陲用兵、廢缺甚久。嘉祐末、仁宗始復修故事、羣臣和御製詩。是日、微陰寒、韓魏公時爲首相、詩卒章云、「輕雲閣雨迎天仗、寒色留春入壽杯。二十年前曾侍宴、台司今日喜重陪」。時内侍都知任守忠、嘗以滑稽侍上、從容言曰、「韓琦詩譏陛下」。上愕然、問其故。守忠曰、「譏陛下游宴太頻」。上爲之笑。

【訓読】

劉子儀 夏英公とともに翰林に在り、子儀素より先達たり。章獻朝に臨みし時、子儀主文たり。貢院に在りて、英公の樞密

副使と為るを聞き、意頗る平らかならず、「候子」の詩を作りて云はく、「空しく厚貌を呈して官道に臨み、大いに人の捷速より過ぐる有り」と。

先朝 春月、多く兩府・兩制・三館を後苑に召して、花を賞し、魚を釣り、詩を賦せしむ。趙元昊 背誕し、西陲にて兵を用ひしより、廃缺すること甚だ久し。嘉祐の末、仁宗 始めて復た故事を修め、群臣 御製の詩に和す。是の日、微かに陰寒たり。韓魏公 時に首相たり、詩の卒章に云はく、「輕雲 雨を闇めて天仗を迎へ、寒色 春を留めて寿杯に入る。二十年前曾て宴に侍し、台司 今日 重ねて陪するを喜ぶ」と。時に内侍都知の任守忠、嘗て滑稽を以て上に侍り、從容として言ひて曰く、「韓琦の詩 陛下を譏る」と。上愕然として、其の故を問ふ。守忠 曰く、「陛下の游宴 太だ頻りなるを譏るなり」と。上之が為に笑ふ。

劉子儀 劉筠、字は子儀、大名の人。『宋史』卷三〇五に伝がある。仁宗が即位すると、給事中となり、また召されて翰林学士となった。

夏英公 夏竦、字は子喬、江州徳安の人。

英国公に封ぜられた。『宋史』卷二八三に伝がある。

翰林院 章獻 章献太后、第十四節の注を参照。

科挙の試験官 貢院 科挙の会試と郷試の試験場

樞密副使 樞密院の副長官。 「候子」詩 候子は、一里塚

の意。『全宋詩』卷二二二(第二冊二八八頁)に、「句」として掲載されている。『全宋詩』は、宋の阮閲の『詩話総龜』前集卷四四所引の『閑居詩話』を出典とし、「大」を「更」に作

る。先朝 仁宗の先代の真宗(在位九九七〜一〇二二)の

時代。兩府 内政を掌る中書省と、軍政・兵事を掌る樞密

院。兩制 内制・外制の二官。内制は翰林学士のことで、

制誥の文を掌る。外制は中書舍人知制誥のことで、軍政を掌る。

三館 各種の文書を掌る三つの館の総称。史館・昭文館・

集賢院をさす。後苑 後宮の庭園。趙元昊 西夏の景

宗。在位一〇三四〜一〇四八。背誕 そむいて反乱を起こ

す。趙元昊は仁宗の宝元元年(一〇三八)十二月に反乱を起こ

した。嘉祐 北宋の第四代皇帝仁宗の年号。一〇五六〜一

〇六三。仁宗については、第十四節の注を参照。韓魏公

北宋の名臣である韓琦(一〇〇八〜一〇七五)のこと。字は稚

圭、みずから鞵叟と号する。安陽(今の河南省安陽)の人。樞

密副使、同中書門下平章事などを歴任し、魏国公に封ぜられた。

『宋史』卷三二二に伝がある。「輕雲」四句 詩題は、「御

製後苑賞花釣魚奉聖旨次韻」。七言律詩の頷聯と尾聯。『全宋詩』

卷三二六(第六冊四〇三九頁)、『安陽集』卷九に収録。前半二

句、『全宋詩』は「雲」を「陰」に、「仗」を「歩」に、「入」

を「送」にそれぞれ作る。後半二句、『全宋詩』は「曾參二十

年前會、今備台司得再陪」に作る。闇雨 雨を留めてもら

さない。台司 三公の地位。ここでは首相をさす。任

守忠 『宋史』卷二二七「宦者伝」によれば、任守忠は虚妄の

言説によって仁宗と英宗を離間した。知諫院の職務にあった司

馬光は、彼の罪を責めて「國之大賊、民之巨蠹」と言い、都の

市場で斬罪に処するように請願している。なお任守忠の官職は、ここでは内侍都知となっているが、『宋史』の伝では内侍副都

知とする。

【現代語訳】

劉子儀は、夏英公と一緒に翰林院に勤めており、劉子儀はもともと先輩であった。章献太后が朝廷に臨んで政治を行っていた時、劉子儀は科挙の試験官をしていた。科挙の試験場で、夏英公が枢密副使となったことを聞き、心中はなほだ穏やかならず、そこで「喉子」の詩を作って、次のように詠った。「恭しい顔つきで役人づとめに励んでいたが、それも空しいことだった。何と、近道を通り抜けて行った者がいる」。

先代の真宗朝では、春の季節に、しばしば両府・両制・三館の役人たちを後宮の庭園に招き、花をめで、魚を釣り、詩を賦させた。趙元昊が謀反を起こし、西の辺境で軍事行動を起こして以来、この催しは長い間行われることはなかった。嘉祐年間の末に、仁宗はようやく昔の風習を復活させ、群臣たちは御製の詩に唱和した。この日、かすかに空が曇り肌寒かった。韓魏公はその時に首相であった。この時作った詩の終章に、次のようにある。「軽やかな雲が雨をさえぎって天子様の儀仗を出迎え、肌寒い空模様が春の気配を留めてお祝いの杯に入り込む。私は二十年前に宴会に侍ったことがあります、宰相として今日再び陪席できましたことを喜ぶものであります」。当時内侍都知の任守忠は、滑稽の才によって仁宗のそば近くに侍っていたが、改まった様子で、「韓琦の詩は、陛下をそしっております」と申し上げた。仁宗はびっくりして、その理由を尋ねた。守忠は、「陛下の遊宴があまりに頻繁に行われることをそしつ

ているのでございます」と答えた。仁宗は、このためにお笑いになった。

一一二二

熙寧初、魏公罷相、留守北京、新進多陵慢之。魏公鬱鬱不得志、嘗爲詩云、「花去曉叢蜂蝶亂、雨勻春圃桔槔閒」。時人稱其微婉。

【訓読】

熙寧の初め、魏公相を罷め、北京に留守たり、新進多く之を陵慢す。魏公鬱鬱として志を得ず、嘗て詩を爲りて云はく、「花は曉叢を去りて蜂蝶乱れ、雨は春圃に勻くして桔槔閑なり」と。時人其の微婉を称ふ。

熙寧 神宗の年号。一〇六八―一〇七七。**魏公** 韓琦のこと。第二十一節の注を参照。**留守** 官名。宋代には西京・南京・北京の三京を置き、親王や大臣をここに置いて畿内の行政長官とした。**北京** 大名府。今の河北省大名県。宋史 卷三二二「韓琦伝」によれば、韓琦が大名府に移つたのは、熙寧元年（一〇六八）のことである。**「花去」二句** 詩題は「登廣教院閣」、七言律詩の頸聯。全宋詩 卷三二八（第六冊四〇五四頁）に収録。全宋詩 は、「曉」を「春」に、「蜂」を「蝴」に、「春」を「朝」に、それぞれ作る。**微婉** 微妙で婉曲な表現の中に、諷刺を含んでいること。ここでは、自

分を花とはねつるべに、「新進」を蜂・蝶と雨に、それぞれたとえているのだろう。

【現代語訳】

熙寧年間の初め頃、魏公の韓琦は宰相をやめ、北京留守となった。新進の役人たちは、その多くが彼を軽侮した。韓琦は鬱々として志を得ず、ある時詩を作って次のように詠った。「花は明け方の草むらから姿を消し去り、蜂や蝶が乱れ飛ぶ。雨は春の田圃にあまねく降り注ぎ、はねつるべは使われることなくひっそりとしている」。当時の人たちは、その表現が微妙かつ婉曲なものであることをほめ称えた。

一一三

元豊初、宦者王紳、效王建作宮詞百首、獻之、頗有
意思。其太皇太后生日詩云、「太皇生日最尊榮、獻壽
宮中未五更。天子捧觴仍再拜、寶慈侍立到天明」。寶
慈、皇太后宮名也。太后幸景靈宮、駕前露面雙童女詩
曰、「平明彩仗幸琳宮、紫府仙童下九重。整頓瓊璫時
駐馬、畫工暗地貌真容」。

【訓読】

元豊の初め、宦者の王紳、王建に倣ひて宮詞百首を作り、之を獻するに、頗る意思有り。其の「太皇太后の生日」の詩に云はく、「太皇の生日 最も尊榮なり、寿を宮中に獻じ 未だ五更

ならず。天子觴を捧じて仍ほも再拜し、宝慈侍立して天明に到る」と。宝慈は、皇太后の宮名なり。

太后 景靈宮に幸じ、「駕前にて面を露はす双童女」の詩に曰く、「平明彩仗琳宮に幸じ、紫府の仙童九重に下る。整頓瓊璫として時に馬を駐め、画工暗地に真容を貌る」と。

元豊 神宗の年号。一〇七八—一〇八五。 王紳 神宗の

時代の宦官。『全宋詩』卷一〇五二（第十八冊二〇五五頁）に、詩二首が収録されている。 王建 中唐の詩人。韓愈に

その才能を認められ、同じく韓愈門下の張籍とともに新楽府運動を推進した。また、「宮詞百首」の作者としても知られる。

宮詞百首 王建の代表作。七言絶句の連作で、宮中の生活を詠ったもの。『全唐詩』卷三〇二に収録。 『太皇太后生日』詩 『全宋詩』卷一〇五二（第十八冊二〇五五頁）。

寶慈 『全宋詩』では、詩の原注として、「寶慈、皇太后宮名」とある。 太皇太后 英宗の宣仁聖烈高皇后。哲宗が即位すると、太皇太后と尊称された。『宋史』卷二四二「皇后伝上」。

景靈宮 宮殿の名前。真宗の大中祥符五年（一〇一

二）十二月、宋の王室の祖先を祀るために作られた。真宗・仁宗・英宗の肖像画が安置されている。 『駕前露面雙童女』

詩 『全宋詩』は、詩題を「太后幸景靈宮駕前露面雙童女」に作り、「彩仗」を「綵杖」に作る。 琳宮 宮廷の美称。

紫府 道教では、仙人の居所を言う。ここでは転じて皇太后の宮殿の美称。 瓊璫 馬具の鳴る音の形容。 暗地 ひそかに。

【現代語訳】

元豊年間の初め、宦官の王紳が、王建に倣って「宮詞」百首を作り、これを献上したところ、大変趣があった。その「太皇太后の誕生日」の詩に、次のようにある。「太皇太后様の御誕生日は、最も尊貴で栄光に満ちている。宮中で長寿の御祝いの儀式を行い、まだ夜明けにはならない。天子様は杯を捧げ持つてなおも再拜し、宝慈宮の女官たちはおそば近くに控えて立ち、夜明けに至る」。宝慈は、太皇太后の宮殿の名前である。

太皇太后が景靈宮に行幸した時、「御車の前で顔をあらわにする二人の童女」の詩を作り、次のように詠った。「夜明けに太皇太后様のはなやかな行列が景靈宮に行幸し、天界の仙童たちが九重に舞い降りて来たかのようにである。整然とした行列、美しく鳴り響く馬具の音、馬は時折り歩みを止め、絵描きはひそかにその姿を描きとめる」。

二十四

歐陽公云、九僧詩集已亡。元豊元年秋、余遊萬安山玉泉寺、于進士閔交如舍得之。所謂九詩僧者、劍南希畫・金華保暹・南越文兆・天台行肇・沃州簡長・貴城惟鳳・淮南惠崇・江南宇昭・峨眉懷古也。直昭文館陳充集而序之。其美者亦止于世人所稱數聯耳。交如好治經、所爲奇僻、自謂得聖人微旨、先儒所不能到。貧無妻兒、不應舉、常寄食僧舍、僧亦不厭苦之。始居龍門山、猶苦遊人往來多、徙居萬安山、屏絶人事、專以治

經爲事、凡數十年、用心益苦、而去人情益遠、衆非笑之、交如不變益堅。雖非中行、其志亦可憐也。

【訓読】

歐陽公云はく、「九僧の詩集已に亡ぶ」と。元豊元年の秋、余万安山の玉泉寺に遊び、進士の閔交如の舎に于いて之を得たり。所謂九詩僧なる者は、劍南の希畫・金華の保暹・南越の文兆・天台の行肇・沃州の簡長・貴城の惟鳳・淮南の惠崇・江南の宇昭・峨眉の懷古なり。直昭文館の陳充集めて之に序す。其の美なる者も亦た、世人の稱する所の數聯に止まるのみ。交如經を治むるを好み、爲す所奇僻たり。自ら謂はく、「聖人の微旨、先儒の到る能はざる所を得たり」と。貧にして妻兒無く、拳に應ぜず、常に僧舎に寄食し、僧も亦た之を厭苦せず。始め龍門山に居するも、猶ほ遊人の往來多きを苦とし、居を万安山に徙す。人事を屏絶し、専ら經を治むるを以て事と爲すこと、凡そ數十年。心を用ふること益す苦にして、人情を去ること益す遠く、衆之を非笑するも、交如變ぜざること益す堅し。中行に非ずと雖も、其の志亦た憐れむべきなり。

九僧 北宋初期の、詩によつて名高かつた九人の僧。「九僧詩」という名の詩集があつたとされるが、歐陽修の「六一詩話」には、その詩集が散逸しているとの記述が見える。「橄欖」第二号「林逋の作者紹介」の項（一一六頁）参照。閔交如未詳。直昭文館 官名。圖書の校正・学生の指導・朝廷の礼儀作法を論議することなどを掌る。陳充 字は若虛、益

州成都の人。太常博士・直昭文館となり、工部・刑部員外郎となる。『宋史』卷四四一「文苑三」に伝がある。

一一五

【現代語訳】

歐陽公が言うには、「九僧の詩集は、すでに失われている」とのことである。元豐元年の秋、私は万安山の玉泉寺を訪れ、進士の閔交如の寄宿舎でこれを手に入れた。九人の詩僧というのは、劍南の希昼・金華の保暹・南越の文兆・天台の行肇・沃州の簡長・貴城の惟鳳・淮南の惠崇・江南の宇昭・峨眉の懷古のことである。直昭文館の陳充が、九僧の詩を集めてこれに序を書いた。そのすぐれたものでも、ただ世人が称賛する数聯に過ぎない。閔交如は儒教の經典について研鑽を積むことを好み、その行いは風変わりであった。みずから、「聖人の玄妙な教えの、先儒が到達できなかったものを学び得た」と称していた。貧しくて妻子がなく、科擧の試験に応じず、いつも僧舎に寄宿し、僧もまたこれを厭わなかった。最初龍門山に住んでいたが、それでもなお旅人の往来が多いことを苦に病み、住まいを万安山に移した。人との交際を絶ち、もっぱら儒教の經典について研鑽を積むことに従事して、およそ数十年。心を砕けば砕けほど、ますます人情から遠ざかり、世間の人々はこれを嘲笑したが、閔交如はいよいよ頑なになり、態度を変えようとしなかった。中庸の行いではないが、その志はやはりあつぱれなものである。

范景仁鎮喜爲詩、年六十三致仕。一朝思鄉里、遂徑行入蜀。故人李才元大臨知梓州、景仁枉道過之。歸至成都、日與鄉人樂飲、散財于親舊之貧者、遂遊峨眉青城山、下巫峽、出荊門、凡暮歲乃還京師。在道作詩凡二百五篇、其一聯云、「不學鄉人誇駟馬、未饒吾祖泛扁舟」。此一事他人所不能用也。

【訓読】

范景仁鎮喜のみて詩を爲り、年六十三にして致仕す。一朝郷里を思ひ、遂に徑行して蜀に入る。故人の李才元大臨梓州に知たり、景仁道を枉よげて之に過る。歸りて成都に至り、日々郷人と飲を樂しみ、財を親旧の貧者に散じ、遂に峨眉の青城山に遊び、巫峽を下り、荊門に出で、凡そ暮歲にして乃ち京師に還る。道に在りて詩を作ること凡そ二百五篇、其の一聯に云はく、「学ばず郷人の駟馬を誇るを、未だ饒あらず吾が祖の扁舟を泛うぐるに」と。此の二事他人の用ふる能はざる所なり。

范景仁鎮 范鎮（一〇〇八～一〇八九）、字は景仁。成都華陽（今の四川省成都）の人。仁宗の宝元元年（一〇三八）の進士。王安石と政見が合わず、熙寧三年（一〇七〇）に戸部侍郎を以て致仕した。『宋史』卷三三七に伝があり、司馬光と親交があつたことが記されている。『全宋詩』卷三四五～三四六

(第六冊四二五三〜四二六七頁) に詩が収録されている。

李才元大臨 李大臨(一〇一〇〜一〇八六)、字は才元。成都華陽の人。仁宗の景祐五年(一〇三八)の進士。神宗の熙寧四年(一〇七二)、知汝州となり、次いで知梓州に移る。『宋史』卷三三二に伝がある。『全宋詩』卷三六〇(第七冊四四〇頁)に、詩四首が収録されている。『青歲』一年。郷人 司馬相如をさす。『史記』卷一七「司馬相如伝」に、「司馬相如者、蜀郡成都人也」とある。『不學』二句 『全宋詩』卷三四六(第六冊四二六頁)に、「句」として掲載されている。

詩駟馬 駟馬は四頭立ての馬車。『華陽国志』卷三「蜀志」に、「司馬相如初入長安、題市門曰、『不乘赤車駟馬、不過汝下也』とある。未饒 遜色がない。見劣りしない。李白の「上皇西巡南京歌十首」其三に、「柳色未饒秦地緑、花光不減上陽紅(柳色は未だ秦地の緑に饒らず、花光は上陽の紅に減せず)」とある。吾祖 范蠡のこと。范鎮と同姓なので言う。

泛扁舟 『史記』卷二九「貨殖列伝」に、「范蠡既雪會稽之恥、(中略)乃乘扁舟浮於江湖」とある。

【現代語訳】

范鎮(景仁)は詩を作るのが好きで、六十三歳で引退した。ある日ふと故郷のことを思い出し、そこでまっすぐに蜀に向かった。旧友の李大臨(才元)が梓州の長官となっていたので、范鎮は寄り道をして彼のもとに立ち寄った。成都に帰り着くと、毎日故郷の人たちと酒を楽しみ、古馴染みの貧しい者たちに財産を分け与え、かくして峨眉山の青城山を訪れ、巫峽を下り、

荊門に出て、およそ一年でようやく都に帰った。道中全部で二百五篇の詩を作り、その一聯に次のようにある。「四頭立ての馬車を自慢した同郷の司馬相如を見習うことはしない。私の心境は、湖に小舟を浮かべたわが祖范蠡に劣るものではない」。この二つの事柄は、他人が典故としてたくみに用いることのできないものである。

一一一六

嘉祐中、有劉諷都官、簡州人、亦年六十三致仕、夫婦徙居頼山。景仁有詩送之云、「移家尚恐青山淺、隱几惟知白日長」。時有朱公綽送諷詩云、「疏草焚來應見史、囊金散盡只留書」。皆爲時人所傳誦。

【訓読】

嘉祐中、劉諷都官有り、簡州の人なり。亦た年六十三にして致仕し、夫婦にて居を頼山に徙す。景仁詩有りて之に送りて云はく、「家を移して尚ほ恐る青山の浅きを、几に隠りて惟だ知る白日の長きを」と。時に朱公綽有り、諷に詩を送りて云はく、「疏草焚き来りて 応に史を見るべし、囊金散じ尽くして只だ書を留むるのみ」と。皆な時人の伝誦する所と爲る。

嘉祐 仁宗の年号。一〇五六〜一〇六三。 劉諷 未詳。

『宋史』『全宋詩』共に記載なし。 都官 刑部尚書の属官。

簡州 四川省簡陽県の東。 頼山 未詳。 朱公綽

字は成之。吳県（今の江蘇省蘇州）の人。仁宗の天聖八年（一〇三〇）の進士。『宋史』に伝なし。『全宋詩』卷二二九（第四冊二六九〇頁）に、詩一首と断句一篇（本作）が収録されている。『疏草』 上奏文の草稿。『全宋詩』は「諫草」に作る。

應見史 隠退して歴史書を見ていることだろう、という解釈と、「疏草 焚き来るも 心に史に見るべし」と訓読して、劉諷の書いた上奏文が歴史書に記載され世に現れることだろう、という解釈の二案が出されたが、ここでは前者を採用した。

【現代語訳】

嘉祐年間に、都官の劉諷という者があり、簡州の人であった。彼もまた六十三歳で引退し、夫婦で頼山に居を移した。范鎮（景仁）は詩を書いて彼に送り、次のように詠った。「家を山に移しても、なおも青山の色の浅さが気にかかる。肘掛に寄りかかって、ただ昼間の時間の長さだけを知る」。その頃、朱公綽という者がいて、劉諷に詩を送って次のように詠った。「上奏文の草稿を燃やして、きつと歴史書を眺めておられることでしょうか。袋の中のお金を使い果たして、ただ書物を留めているばかりでしょう」。いずれの詩も、当時の人たちによって伝誦された。

一二十七

大名進士耿仙芝、以詩著、其一聯云、「淺水短蕪調馬地、淡雲微雨養花天」。爲人所稱。

【訓読】

大名の進士 耿仙芝、詩を以て著る。其の一聯に云はく、「淺水短蕪 馬を調ふるの地、淡雲 微雨 花を養ふの天」と。人の称ふる所と為る。

大名 河北省大名県。 **耿仙芝** 『宋史』には伝がない。

『全宋詩』卷三七三八（第七一冊四五〇七八頁）に、この一聯の対句のみが記載されており、出典を『吟窓雜錄』卷三四とする。文字の異同はない。

【現代語訳】

大名の進士の耿仙芝は、詩によって著名であった。その詩の一聯に、次のようにある。「浅い水、短い草、馬を訓練するのにふさわしい地。淡い雲、細かな雨、花を育てるのにふさわしい天」。当時の人たちに称賛された。

一二十八

唐明皇以諸王從學、命集賢院學士徐堅等討集故事、兼前世文詞、撰『初學記』。劉中山子儀愛其書、曰、「非止初學、可爲終身記」。

【訓読】

唐の明皇 諸王を以て学に從はしむるに、集賢院学士の徐堅等に命じて故事を討集し、前世の文詞を兼ねて、『初学記』を

撰せしむ。劉中山子儀 其の書を愛して曰く、「初学に止むるのみに非ず、『終身記』と為すべし」と。

唐明皇 唐の玄宗。本名は李隆基。在位七二二―七五六。

集賢院學士 官名。経籍の編集などを司る。

徐堅 徐堅

(六五九―七二九)。「旧唐書」卷一〇二、「新唐書」卷一九九に伝がある。

初學記

書名。唐の玄宗の命で徐堅らが編

んだ類書、全三十卷。王子たちの詩文作成の参考書として作られた。

劉中山子儀

劉筠、字は子儀。第二十一節の注を参照。

照。

【現代語訳】

唐の玄宗は王子たちを学問に従事させるにあたって、集賢院學士の徐堅らに命じて故事を捜し集め、過去の時代の詩文をあわせて、『初学記』を編集させた。劉中山子儀はその書物を愛し、「ただ単に初学にとどまるのみならず、『終身記』とすべきである」と言った。

二十九

宗袞嘗て曰く、「殘人衿才、逆詐恃明、吾終身不爲也」。

猶唐相崔渙曰、「抑人以遠謗、吾所不爲」。

【訓読】

宗袞嘗て曰く、「人を殘なひて才を衿り、詐を逆へて明を恃

むは、吾れ終身為さざるなり」と。猶ほ唐の相 崔渙の、「人を抑ふるに遠く謗るを以てするは、吾が為さざる所なり」と曰ぶがことし。

この一節は、宋の宋敏求(一〇一九―一〇七九)の『春明退朝録』巻上にもほぼ同じ記述がある。内容は詩に関するものではないので、何らかの事情で司馬光の詩話に紛れ込んだのではないかと思われる。

宗袞 一族の中で、高位にある者に対する呼称。具体的に誰をさすのかは不明。

逆詐 だまされないようにあらかじめ用心すること。「論語」「憲問篇」に、「不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎(詐りを逆へず、信ぜられざるを億らず、抑も亦た先づ覺る者は、是れ賢か)」とある。

抑人一文 『新唐書』卷二〇「崔渙伝」に、「常曰、「抑才虞謗、吾不忍爲」と、ほぼ同様の記述がある。

【現代語訳】

一族の高位にある者が、かつて次のように言ったことがある。「人を害して自分の才を誇示し、人からあざむかれないように用心して自分の明察を頼みとするようなことは、私は生涯したくない」。唐の宰相の崔渙が、「遠回しにそしめることによって人を抑えつけるようなことは、私はしない」と言ったのに似ている。

三十

杜甫終于未陽、藁葬之。至元和中、其孫始改葬于鞏縣、元微之爲誌。而鄭刑部文寶謫官衡州、有「經未陽子美墓」詩、豈但爲誌而不克遷、或已遷而故塚尚存邪。

【訓読】

杜甫 未陽に終はり、之を藁葬す。元和中に至り、其の孫始めて鞏県に改葬し、元微之の誌を爲る。而るに鄭刑部の文宝官を衡州に謫せられ、「未陽の子美の墓を經たり」の詩有り。豈に但だ誌を爲るのみにて遷す克はざるか、或ひは已に遷して故塚尚ほ存するか。

この一節も、『春明退朝録』卷上に見える。やはり、誤つて司馬光の詩話に混入したものと思われる。中華書局『古典文学研究資料彙編杜甫卷』「上編唐宋之部」（第一冊七九頁）参照。

未陽 今の湖南省耒陽県。藁葬 仮に葬ること。

元和 中唐の憲宗の年号。八〇六〜八二〇。其孫 杜嗣業。

杜甫の次男宗武の子。鞏縣 今の河南省鞏義市。杜甫の生地。

元微之 元稹（七七九〜八三一）、字は微之。中唐の詩人。

爲誌 元稹の「唐故工部員外郎杜君墓係銘並序」をさす。鄭刑部文寶 鄭文宝。刑部は刑部員外郎。詳しくは第四節の注を参照。

衡州 今の湖南省衡陽市。未陽の北約八十キロメートルの所に位置する。「經未陽子美墓」詩

未詳。『全宋詩』の鄭文宝の項にはこの詩題はない。ちなみに、『宋史』卷一七七「鄭文宝伝」には、鄭文宝が衡州に流されたという記事はない。克 「能」に同じ。

【現代語訳】

杜甫は未陽で世を去り、これを仮に葬った。元和年間になって、その孫がようやく鞏県に改葬し、元稹（微之）が墓誌銘を書いた。ところが、刑部員外郎の鄭文宝が衡州に左遷された時の詩に、「未陽の杜甫の墓を通り過ぎて」というものがある。ただ墓誌銘を書いただけで、実際には墓を移すことができなかったのだからか。あるいは、すでに墓を移してしまったのだが、古い塚がなおも残っていたのだろうか。

三十一

北都使宅、舊有過馬廳。按唐韓偓詩云、「外使進鷹初得按、中官過馬不教嘶」。注云、「乘馬必中官馭以進、謂之過馬。既乘之、然後蹀躞嘶鳴也」。蓋唐時方鎮亦倣之、因而名廳事也。

【訓読】

北都の使宅に、旧と過馬厅有り。按ずるに唐の韓偓の詩に云はく、「外使鷹を進めて初めて按を得たり、中官馬を過めて嘶かしめず」と。注に云はく、「馬に乗るに、必ず中官馭して以て進む、之を過馬と謂ふ。既に之に乗り、然る後に蹀躞嘶

鳴するなり」と。蓋し唐の時、方鎮も亦た之に倣ひ、因りて庁事に名づくるならん。

倣い、それゆえ役所に（過馬庁と）名づけたのであろう。

この一節は、『詩話総龜』に見える。北都 唐代には、太原府を北都とした。今の山西省太原県。使宅 未詳。

過馬廳 唐代の制度で、方鎮の役所のこと。韓偓 韓偓（八四四～九三三）、字は致堯。晩唐の詩人。「外使」二句

「苑中」と題する七言律詩の頸聯の二句。『全唐詩』卷六八〇に収録。『全唐詩』は、「進」を「調」に作る。外使進廳初得按 『全唐詩』の注に、「五方外按使、以鷹隼初調習、始能擒獲。謂之得按」とある。五方は、中央と東西南北の四方。

外按使（外使）は、鷹狩に使う鷹を調教する役人。中官 宦官。「乘馬」一文 『全唐詩』は、「乘馬」の前に「上每」の二字あり。また「中官」を「閹官」に作る。また「也」の字がない。蹠蹠 馬が歩くさま。『全唐詩』は、「蹠蹠」に作る。方鎮 藩鎮。廳事 役所。

【現代語訳】

北都太原県の使宅に、昔は過馬庁があつた。思うに、唐の韓偓の詩に次のようにある。「鷹狩の役人が鷹を調教して、やつと獲物を捕れるようになった。宦官が馬を連れて来て、いかなかないようにする」。その注に、次のようにある。「（天子がいつも）馬に乗る時には、必ず宦官が馬のたづなを引いて進む。これを過馬という。（天子が）馬に乗ってから、その後で歩き、いなくなるのである」。思うに、唐の時代には方鎮もまたこれに